

アオサギ *Ardea cinerea jouyi* Clark 1907, サギ科 Ardeidae, コウノトリ目 CICONIFORMES, の越冬群について

小野 泰正

1. はじめに

アオサギ *Ardea cinerea jouyi* Clark 1907 は、コウノトリ目 CICONIFORMES のサギ科 Ardeidae に属する日本最大のサギで、全長は約 93cm, 翼開張は約 160cm である。アオサギの漢字表記は、清棲 (1978) によれば「蒼鷺」である (ただし同書の属名の蒼鷺属は蒼鷺属の誤植)。

サギ類は、嘴・頸・そして特に足が細長く、浅い水中を歩いて行動する水鳥が多く、いわゆる渉禽 (しょうきん) 類 (wading bird) とよばれる。種としてのアオサギは、ユーラシア大陸の温暖帯とアフリカ大陸の一部に分布する (例えば Coomber: 1991)。

小林 (1976) は、アオサギは日本では本州中部以南には冬期も滞在するが、一部は温暖地に渡去するとした。高野 (1981) は、アオサギは留鳥または漂鳥とし、同じく高野 (1982) は九州以北で繁殖するとし、また北海道は繁殖地 (夏鳥)、東北地方の太平洋側は越冬地 (冬鳥)、日本海側は周年生息する地域 (留鳥) としていることが読み取れる分布図を示している (括弧内は筆者)。さらに高野 (1985) は、北方のものは冬期は暖地に移動するとした。

しかし高野 (1982) の増補版である高野 (1989) では、東北地方の大部分を周年生息する地域に修正したとみられ、越冬地は太平洋沿岸部にわずかに残している。

東北地方太平洋側の岩手県の場合について葛 (1975) は、本州の中部以南では冬期にもとどまるものがある、とした。

宮城県の場合については、伊豆沼クラブ (1985) は巻末の鳥類リストにおいて、アオサギは伊豆沼での留鳥としている。ただしこの地域で繁殖するとは明記していない。これは、春夏秋冬という四季からみれば、どの季節にもみられるので留鳥としたことがうかがえる。ただし本書はダイサギについては、本文には夏・秋・冬にいと記述されているが、巻末リストでは冬鳥としている。日本野鳥の会宮城県支部 (1992) は、アオサギは仙台市蒲生干潟では毎年 20~40 羽位が越冬している、としている。

最近、竹丸 (1994) は、名取川河口部を含む広瀬川流域の鳥類について記述し、そのなかでアオサギは留鳥であること、上流域では春期を除く各期に、中流域では秋期に、下流域では春期を除く各期に確認したこと、を記述している。しかし出現個体数は特に多くはなく、冬期については上流で 1 個体、中流では確認がなく、下流では出現回数 4 回で 6 個体の出現個体数であった。このことについては、調査範囲が 1991 年から 1994 年までの調査期間のうちの前半は、下流域が広瀬川と名取川の合流点までであったこと、後に調査区間が名取川河口までになったこと、そのため現地調査は 1991 年度に実施された建設省仙台工事事務所による名取川水系鳥類調査の資料を併用したこと、しかし十分といえない部分もあったこと、を述べている。

筆者はこれまで、自然環境の調査研究と動物生態研究の一環として、各地の鳥類の調査研究を継続してきたが、そのなかで宮城・岩手両県におけるアオサギの生息状態について、ほとんど公表されていない新たな知見を得ているので、ことに冬期における生息状態を中心に取りま

とめた。

この調査地域の海岸部は、干潟がシギ・チドリ類の渡来地として知られる（例えば、竹丸ら：1973）。宮城県は、仙台湾海浜県自然環境環境保全地域に指定している。

筆者は、この地域の主要な動物群について記述した（小野：1982）。

2. 海岸部における冬期の生息

宮城県では、冬期のアオサギの生息は、海岸部において顕著である。筆者は図1および図2に示したように、仙台市蒲生干潟のほか、名取川河口部の井土浦、その南側の名取市の広浦、さらに南の巨理町の鳥の海を調査した。井土浦の南側にある名取市の広浦は、現在も調査中であり、本報では割愛する。

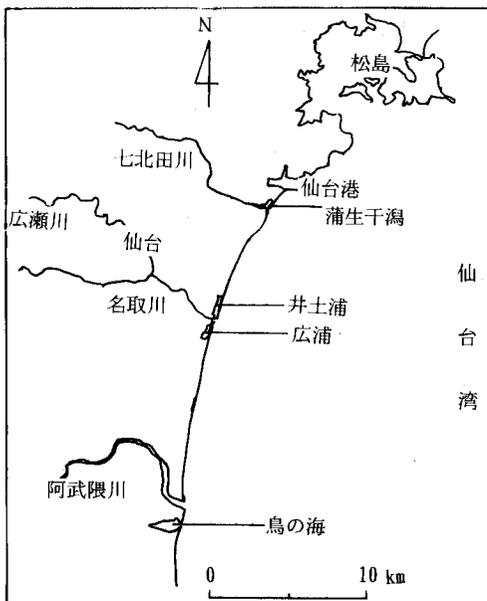


図1 仙台海浜地帯調査地

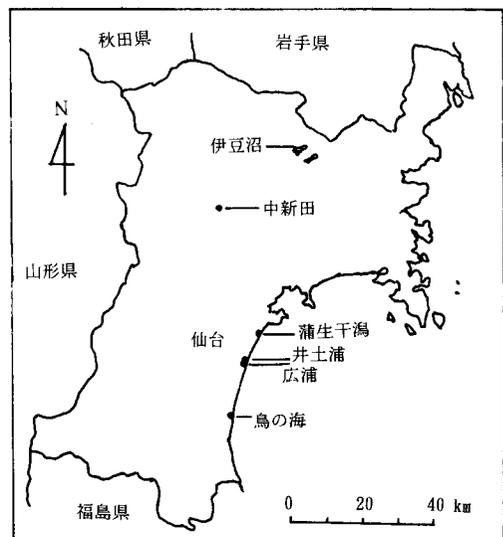


図2 宮城県内調査地

(1) 仙台市蒲生干潟

シギ・チドリ類の渡来地として特に有名な蒲生干潟は、仙台市の東北部を占める宮城野区の海岸部にある。この干潟は、白砂青松の続く仙台海浜地域で仙台湾に注ぐ2級河川七北田川の、河口部の北側に伸びて存在する。

筆者が小年時代に行った蒲生海岸は、七北田川が河口部で急にほぼ直角に北側に曲がっていたため、外洋側の砂浜海岸に出るためには川を渡らなければならなかった。そこには、干潟は存在していなかった。したがって現在の干潟は、その後河口が現在の場所に開いたために取り残された旧河道跡であると考えている。このことについては、西村・宮城・松本（1982）が記述し、1950年代までは河口部は上記のとおりであったことを明らかにしている。

干潟は南北に長いが、冬期に多くのアオサギが観察されるのは干潟中央部ではなく、その西北部すなわち陸側であり、アオサギはヨシ群落と水面の接する汀線に沿って、長い列をなして

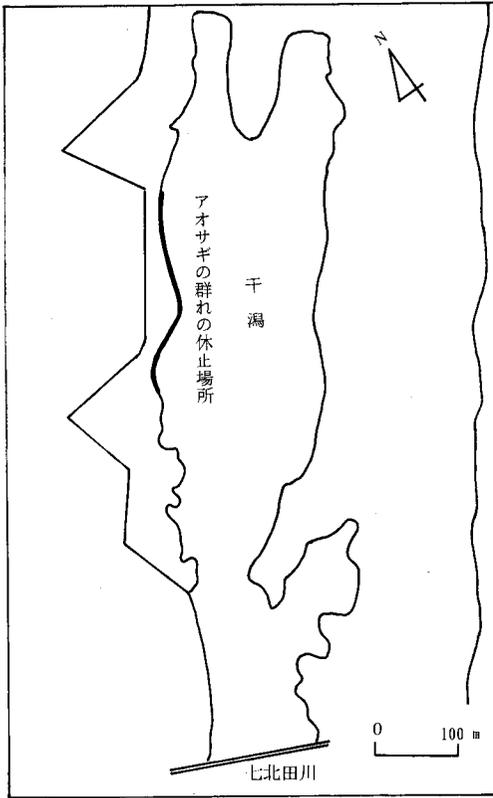


図3 仙台市蒲生干潟



図7 仙台市井土浦

休止している。これを示したのが図3, および図4と図5である。

日本野鳥の会宮城県支部の支部報「雁」の鳥信欄には、1984年10月14日20羽(後藤三夫), 同10月21日24羽(黒田昌弘), 同11月4日27羽(黒田昌弘), 1985年12月2日20羽(黒田昌弘), 1986年12月29日35羽(後藤三夫), 1987年9月12日17羽(黒田昌弘), などの記録がある。筆者の調査結果では、これまで確認したアオサギの群れの最大個体数は112羽(1991年1月8日)であった。

なおアオサギは、図6(1993年1月9日)に示したように、さらに西側の養魚場付近でも行動していたが、現在ではこの養魚場は埋め立てられている。この跡地がどのように利用されるのか、干潟本体により近い後背地であるだけに気がかりである。

(2) 仙台市井土浦

井土浦は仙台市若林区にある潟湖で、図7に示したように名取川河口部の北側(左岸側)に長く伸び、長さ約2.5km、幅約200mである。井土浦の西側には、貞山堀と通称される運河が南北に通っており、運河の両岸は堤防である。この堤防のうち西側(陸側)の堤防は高く、その天端は自転車道となっている。運河の東側の堤防は西側(陸側)の堤防よりは低い、植えられたクロマツが高木となっているほか、ヨシの生育があって、浦の見通しは十分でない。なお東側の堤防は、樋門の向かい側付近で破堤しており、ここからは浦の北部がかなり見通せる。井土浦は蒲生や鳥の海のように知られていないが、水鳥の生息地である。この地域の鳥



図4 仙台市蒲生干潟のアオサギ



図5 同上



図6 蒲生の養魚場のアオサギ

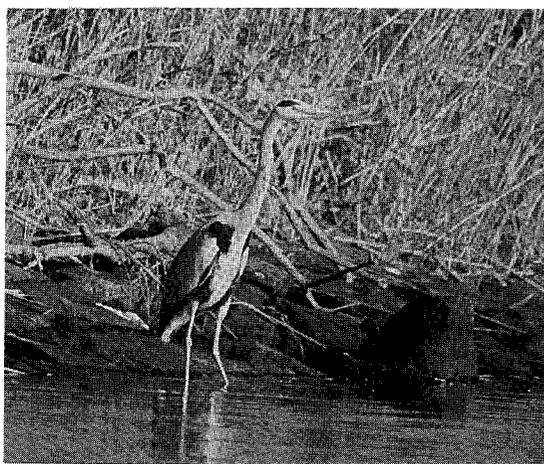


図8 仙台市井土浦のアオサギ

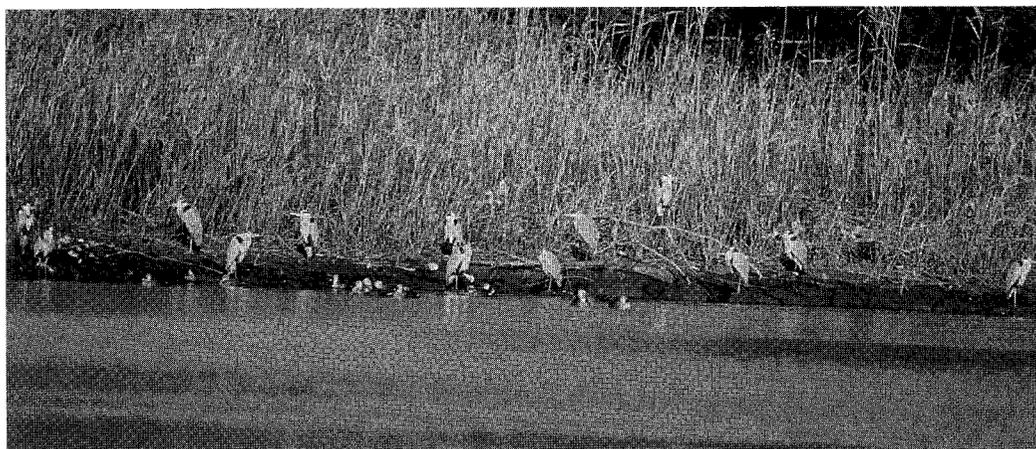


図9 仙台市井土浦のアオサギの群れ1

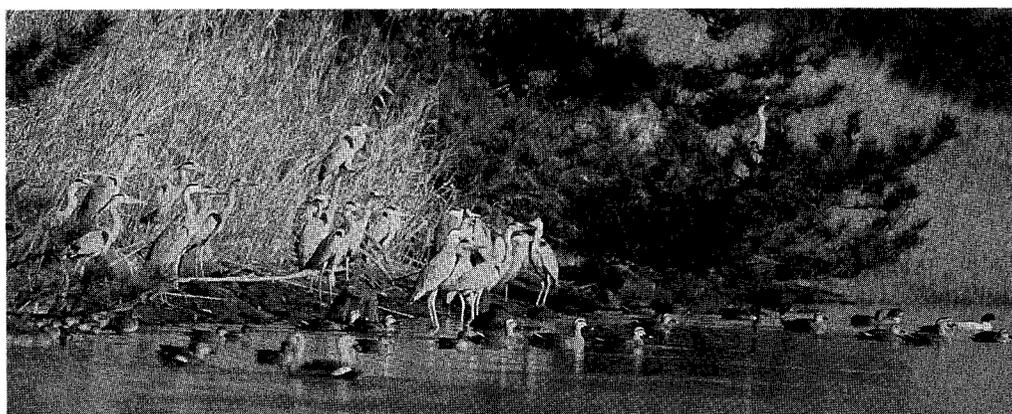


図10 仙台市井土浦のアオサギの群れ2



図11 同：枯木上のアオサギ



図12 同：アオサギの飛翔

類について継続して調査研究した結果は、別に取り扱う。

アオサギは、冬期この浦で個体数が増加する。アオサギは、秋期の引き潮のときなどは干潟や浅瀬にでているが、冬期には多くの個体が浦の中央部で常に行動しているのではなく、蒲生の場合と同様に、群れは東側堤防の東側（浦側）の汀線の直ぐ上の場所に休止している。これを示したのが図8、図9および図10である。

この場所は、通常のセンサス・コースの、自転車道となっている西側（陸側）堤防からは見えない。筆者は、地元の漁業協同組合員に依頼して船外機付の小船に乗って浦の中を調査し、群れの存在を確認した。これまでに認めた冬期のアオサギの群れの顕著な事例は1994年12月29日の場合で、図9の13羽および図10に示した22羽、計35羽である。

ほかに日本野鳥の会宮城県支部の支部報「雁」の鳥信欄には、井土浜として1987年11月11日27羽（橋本常治）が記載されている。

井土浦では、アオサギのいろいろな出現状態がみられる。堤防のクロマツの樹上に止まっていたり、ヨシ原の枯木の上にながりの時間静止していたり（図11）、周辺からの飛来が見られたり（図12）である。

(3) 巨理町鳥の海

この潟湖は、宮城県沿岸南部の巨理町にあり、阿武隈川河口部の南側に位置している。鳥の海（図13）は東西2.3km、南北1.2km、面積1.51km²で、潟の中央に蛭塚と呼ばれる小島がある。この潟湖やそのまわりの湿地は昔から鳥類が多く、伊達藩の御狩場であったという。現在は潮干狩り、釣り、各種のレジャースポーツなどに利用されている。

鳥の海の鳥類の資料は、蒲生と比較してはるかに少なく、ことにアオサギの記録は「雁」にもほとんど寄せられていない。

この潟湖は干潮時には広く干潟が出るが、この場合にはアオサギは浅瀬に出て採餌行動をおこなっている（例えば図15：1995年1月21日）。

冬期のアオサギの群れは、荒浜港の南側堤防の西端側の上に並んで休止しているのが認められる（図13の矢印および図14）。なお図14では、堤防上にはほかにオオセグロカモメとウミネコが並んで休止している。また、ウミウが並ぶことがある。

筆者は1995年5月から96年3月まで継続して調査したが、アオサギの個体数は下表のような推移を示した。

表1 鳥の海におけるアオサギ個体数の変化

調査年	1995							1996			
	5		6	7	8	9	10	11	1	3	
月	5		6	7	8	9	10	11	1	3	
日	4	28	16	2	26	30	21	19	2	2	10
個体数	0	0	0	0	0	8	0	16	20	(16)	1

[注] 1996年3月2日の(16)と記入してある群れは、鳥の海の北側の阿武隈川にかかる巨理大橋の下の直ぐ上流側の草本群落内で目撃された群れである。

上の表において、1996年3月2日は強風が吹き荒れた日で、潟湖内は白波が立ち、鳥影がなかった。同日、アオサギの群れは巨理大橋の下の直ぐ上流側の草本群落内で目撃された（図12：矢印）。これまでこの草本群落では、しばしばコサギの小群を目撃するが、アオサギは目撃していない。このことから、ここで目撃された16羽の群れは、鳥の海から避難した群れと推測



図 14 巨理町鳥の海干潟のアオサギ. ほかにウミネコとオオセグロカモメがいる

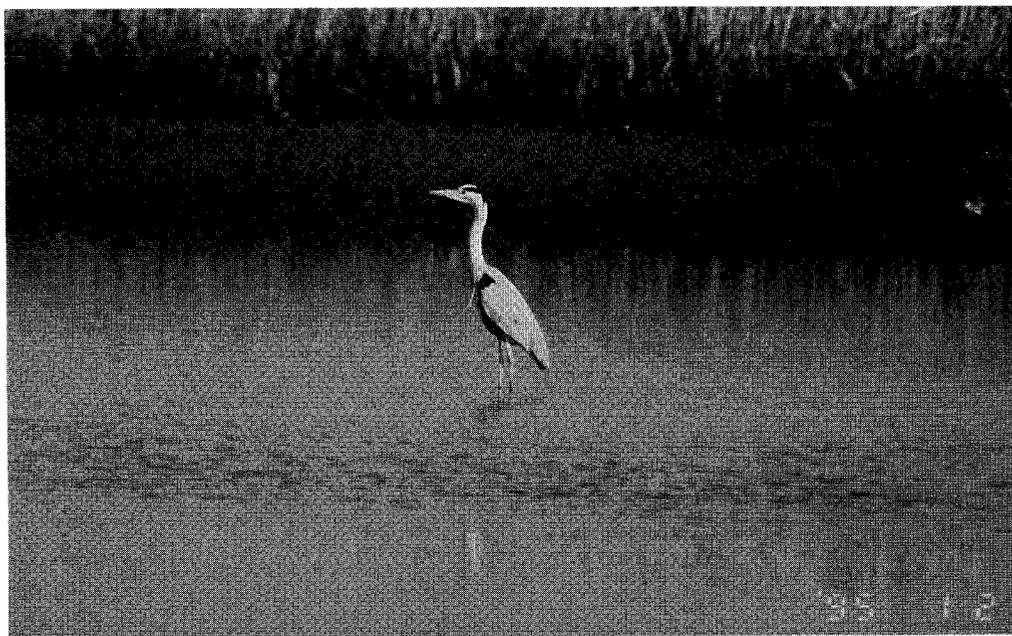


図 15 巨理町鳥の海干潟のアオサギ

される。

これらを考慮して表1の結果からは、アオサギは鳥の海で20個体程度が越冬群として生息すると考えられる。

また表1の9月30日の場合もアオサギは干潟の浅瀬におり、ここでは特に成鳥と巣立ち後の若鳥という家族群での存在が認められた。

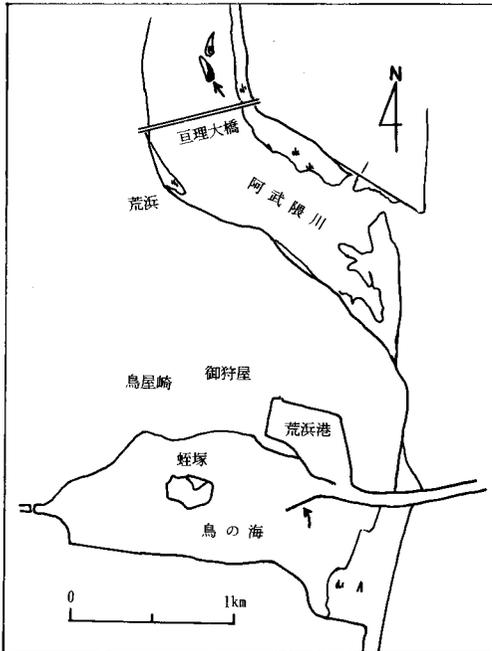


図13 宮城県巨理町鳥の海

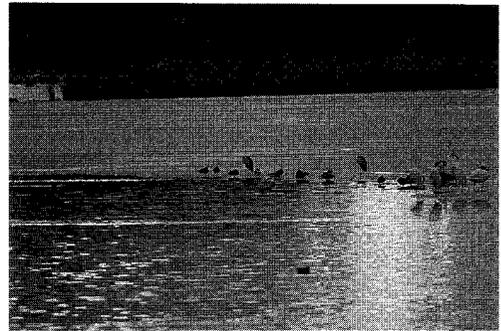


図16 宮城県伊豆沼水上のアオサギ
ほかにダイサギがいる

3. 内陸部での越冬

内陸部では、アオサギは前述のように、ことに伊豆沼(図2)では例年越冬が認めらる。伊豆沼は、よく知られているように、ガン・カモ・ハクチョウ類などの集団渡来地であり、さらにシギ類などの立ち寄りを含め、いわゆる水鳥の楽園と評価される。この地域の伊豆沼・内沼は国の天然記念物に、また県自然環境保全地域に指定されている。さらにいわゆるラムサール条約の登録湿地である。

この湖は、厳寒期にはほとんどが氷結することがあり、ここを“ねぐら”とするマガンやカモ類の群れは、凍結せずに残った開放水面に密集するようになる。図16は、開放水面と氷面の境目そばにたたずむアオサギである。この図には、ほかにダイサギがいる。

今回、筆者はさらに内陸部の中新田町(図2)で、本種の越冬群を確認した。この場所は、宮城県北地域などで自然観察を続けている下山安氏(日本野鳥の会会員・中新田)のフィールドの一つで、同氏の案内で1995年1月の調査時に24個体の越冬群を目撃した。場所は、1級河川鳴瀬川に、左支流の田川が合流する地点の鳴瀬川側である。ここでは鳴瀬川はほぼ東北東に流れているが、群れは左岸(北岸)の堤防の南南東面にたたずんでいた。当日は北西の季節風が強かったが、堤防南面はそれを遮る状態であった。下山氏によれば、アオサギは例年ここで群

れで越冬するという。また合流点直下流には堰があり、付近はその湛水面となっていて川幅が広く、ここではアオハクチョウを主とするハクチョウ類の集団やカモ類が越冬している。内陸部でのこのようなアオサギの群れの越冬は、これまでほとんど知られていない。

しかし、1996年3月に再び現地調査を実施したところ、現地は第56回国民体育大会カヌーレーシング競技会場鳴瀬川河川局部改良護岸工事のため、堤防一帯は改変されていた。この工事はさらに続行されるようである。

この、内陸部で越冬していた群れの、今後の動向が注目される。

4. 論 議

アオサギは、宮城県内では夏期から秋期には、かなり広い範囲で認められる。このことは日本野鳥の会宮城県支部の支部報「雁」の鳥信欄においても明らかであり、筆者の未発表資料でも同様である。

筆者は、かつてNHK TVが「自然のアルバム」で小野田町魚取沼の「鉄魚」（国指定天然記念物）の番組を製作したとき、仙台放送局のスタッフと数日間日現地に入ったが、夏期、アオサギ1個体が沼の岸辺の樹林上にいるのを目撃した。アオサギは取材班の活動のためかやがて飛び去り、アオサギによる天然記念物鉄魚の捕獲は確認しなかったが、奥羽山脈脊梁部直下のブナ林内の沼での活動であり、印象に残る事例であった。ただし、仙台市沿岸部の大沼の事例（「雁」の鳥信欄）や、筆者（小野：1994）の長面浦（北上川河口付近）を除いては、アオサギほとんどの場合が1個体で出現している。

岩手県内陸部においても、アオサギはことに北上川で目撃されるが、通常は個体としての活動である。なお筆者は1992年秋に花巻市域において、本川に猿ヶ石川が合流する付近の上下流の浅瀬で、計7羽が散在するのを観察した。また山間部では、1993年8月、湯田町湯本温泉地区を流れる和賀川（北上川右支流）の浅瀬で行動する個体を目撃した。これらのことから、アオサギは岩手県でも夏期以降において山間地で行動することがあると認められる。

松尾村八幡平では、1995年から96年冬期にかけての調査で、アオサギはこれまでの知見にはない生息状態が認められた。それは松川における夏期から秋期にかけての家族群の生息である。この地域におけるアオサギの動向については、なお調査を継続している。

山形県内陸部では、1993年から1994年にかけて、南陽市白竜湖とその隣接地域を調査した結果、アオサギは夏期以降に水田などでは単独で行動している場合と、家族群とみられる小群で休止している場合とが認められた。ただし、冬期調査は未完である。

しかしいままでのところ宮城県内や岩手県内では、秋田市内におけるようなアオサギの集団繁殖地（いわゆるサギ山）は確認されていない。秋田市のサギ山を調査研究している平良辰夫氏によれば、アオサギは夏期の後半からサギ山を離れ、秋期には姿を消すということから、宮城・岩手両県下におけるアオサギが、ここからの分散であることも考えられる。

本報の宮城県鳥の海の場合、秋期に成鳥と若鳥という家族群での存在が認められたことは、やがていくつかの家族群が集合して、越冬する群れを形成することを示唆している。

これとは別に、筆者はかつて宮城県唐桑半島において、秋期にアオサギの20羽を超える群れが海岸線を南下するのを目撃したことがあるので、より北の地域で繁殖した群れの移動によることも考えられる。

本報で明らかにしたような越冬群は、1996年1月、岩手県内でも認められた。これは塚本吉

雄氏によるもので、宮古市の津軽石川河口部のヨシ原沿いに、アオサギの群れが並んで休止していたという。

日本のサギ科最大のサギであるアオサギの生態は、広域的な観察・研究が必要となろう。

5. 要 約

サギ科 Ardeidae (コウノトリ目 CICONIFORMES) に属する日本最大のサギであるアオサギ *Ardea cinerea jouyi* Clark 1907 の越冬状態と、他の季節における出現・生息状態について、宮城県内を主とし、隣接する岩手・山形両県下を含めた地域において調査研究した。

その結果、越冬する群れは、沿岸部では宮城県仙台海浜地帯の仙台市蒲生干潟、仙台市井土浦、亘理町鳥の海で確認され、岩手県宮古市津軽石川河口部での情報を得た。

内陸部では、越冬するアオサギの群れは宮城県中新田町の鳴瀬側河川敷で認められた。

その他の季節では、アオサギは単独個体で行動している場合が多く、夏期の後半以降は若鳥を連れた家族群の存在が目だった。

越冬するアオサギの群れは、いくつかの家族群が集合して形成されることが考えられた。

謝 辞

この調査には多くの方々のご協力をいただいた。ことに宮城県沿岸部の調査にご協力いただいた宮城県環境保全課の方々、桜井一平氏とそのチーム、内陸部の調査にご協力いただいた下山安氏、山形県内陸部の調査にご協力いただいた宮崎悟氏・吉江敏雄氏、八幡平地域の調査にご協力いただいた土門成隆氏、秋田市の鷺山について情報をいただいた平良辰夫氏、津軽石川の情報をいただいた塚本吉雄氏、宮城県内の調査時に記録係をつとめた小野洋子氏に、心から感謝する。

主 要 文 献

- Coomber R. (1991): Birds of the World. 240 pp. CLB.
 遠藤君男 (1987): 岩手の鳥獣百科. 223 pp. の写真. 岩手日報社. 盛岡.
 Ferix, J. (1991): The Illustrated Encyclopedia of Birds. 320 pp. Treasure Press. London.
 伊豆沼クラブ (1985): 伊豆沼の鳥たち. 123 pp. 宝文堂. 仙台.
 清棲幸保 (1978): 増補改訂版日本鳥類大図鑑. 236 pp. 講談社. 東京.
 小林桂助 (1976): 原色日本鳥類図鑑. 248 pp. 保育社. 大阪.
 葛精一監修 (1975): 岩手の鳥獣. 274 pp. 岩手県環境保健部自然保護課. 盛岡.
 西村嘉助・宮城豊彦・松本秀明 (1982): 仙台湾海浜県自然環境保全地域の地形及び地質. 仙台湾海浜県自然環境保全地域学術調査報告書. 2-20 + 写真版 p. 4. 宮城県.
 日本野鳥の会宮城県支部: 支部報「雁」の各号.
 日本野鳥の会宮城県支部編 (1992): 宮城の野鳥. 249 pp. 河北新報社. 仙台.
 小野泰正 (1982): 仙台湾海浜県自然環境保全地域の動物. 仙台湾海浜県自然環境保全地域学術調査報告書. 62-83 + 写真版 p. 4. 宮城県.
 小野泰正 (1994): 硯上山・万石浦県立自然公園地域の動物. 硯上山・万石浦県立自然公園学術調査報告書. 硯上山・万石浦県立自然公園学術調査委員会編. 145-158. 宮城県.

小野：アオサギ *Ardea cinerea jouyi* Clark 1907, サギ科 Ardeidae, コウノトリ目 CICONIFORMES, の越冬群について 171

- Ono, Y. (1994) : Behavior of the Black-Crowned Night Heron, *Nycticorax nycticorax nycticorax* (Linnaeus), in the city of Morioka and its neighbors, Iwate Prefecture, in Northeast Japan.
Saito-Ho-on Kai Museum Bulletin, No. 62, 37-48.
- 高野伸二監修 (1981) : 日本産鳥類図鑑。474 pp. 東海大学出版会。東京。
- 高野伸二 (1982) : フィールドガイド日本の野鳥。326 pp. 財団法人日本野鳥の会。東京。
- 高野伸二 (1985) : 日本の野鳥。591 pp. 山と溪谷社。東京。
- 高野伸二 (1989) : 増補版フィールドガイド日本の野鳥。342 pp. 財団法人日本野鳥の会。東京。
- 竹丸勝朗・花輪伸一・小山均・小笠原高 (1982) : 蒲生海岸およびその近隣地域におけるシギ・チドリ類の渡来状況の比較。吉岡邦二編 蔵王山・蒲生干潟の環境破壊による生物群集の動態に関する研究。144-152。
- 竹丸勝朗 (1994) : 広瀬川流域の鳥類。広瀬川流域の自然環境。715-844. 仙台市環境局環境計画課。

Winter flocks of the Eastern Gray Heron, *Ardea cinerea jouyi* Clark 1907, Ardeidae, CICONIFORMES

Yasumasa ONO

The Eastern Gray Heron, *Ardea cinerea jouyi* Clark 1907, is a wading bird belonging to Ardeidae, CICONIFORMES, and the largest species in body length of Family Ardeidae in Japan. The Eastern Gray Heron had been regarded as a summer visitor or a winter visitor and or a resident bird in Tohoku District. I found some winter flocks of this bird on lagoons, in the city of Sendai and Watari Town, and Narusegawa River in Nakaniida Town, in Miyagi Prefecture. The gray heron is a resident bird in Miyagi Prefecture, but its heronry is not observed nearly here. So winter flocks of the gray heron are regarded as a migratory, in these areas.